

キリストの聖体 (ルカ 9:11b-17)

中濱繁喜神父様は信者のパンになってくださいました



今週、「キリストの聖体」の祭日なのは重々承知していますが、中濱繁喜神父様の追悼をしたいと思います。中田神父と中濱弟神父様とは学年二つ違いです。司祭時代はしょっちゅう同じ地区で顔を合わせました。三年前、私が下五島地区長、中濱師が上五島地区長を中村大司教様から仰せつかったのですが、私は上五島出身、彼は下五島の出身、慣れた土地の地区長でも良かったと思うのです。

しかし中濱師には苦手なことがありました。彼は極端な乗り物酔いをする人でした。小神学生時から、私が奈良尾からフェリーに乗ると、すでに福江から奈留島、奈良尾まで船で揺られていた中濱師は真っ青な顔をして死人のようでした。彼の口癖は「あー、船に酔った。もうダメばい」でした。別に波浪注意報警報が出ているわけでは無いんです。子どもが風呂場で波を立てる、それくらいの波で「あー、酔った。もうその先のことはしいきらん」となっていたのです。

これで、想像つくと思いますが、下五島には二次離島がありますね。久賀島、奈留島、嵯峨島です。地区長は教区長の代理で地区内のすべての教会に目を配る必要がありますが、毎週浜脇教会に来ては「あー、酔った。今日はまともにミサできんばい」となられては困るわけです。そこで中村大司教様は、どちらを選んでも良かったのだけれども、中田神父を下五島の地区長に据えた。そうなのではないかと思っています。

非常に几帳面な人でした。任された仕事を投げ出すことは決してありませんでした。途中も手を抜いたりしませんでした。私などは結果オーライなので、途中は助任にさせて、いいところ取りすることに何の抵抗もありません。修道院のミサでも、これは黒島教会時代のことですが、シスターたちは「定期船が欠航したからミサ休みだ」と言っているのに、ご本人が「修道院のミサに行かなければ」と言って定期船が欠航になっているのに、同級生の大村さんの船に頼んで帰ることがありました。

浦上教会の通夜で、次のようなエピソードが紹介されました。中濱師のノートが誰よりも几帳面に書かれているので、ある同級生は中濱師のノートを当てにして、大学の授業をサボったりしていたそうです。それでも気さくな中濱師は躊躇せずノートを貸してくれて、おかげで大学の単位を取らせてもらった生徒もいたらしいです。

どんな務めも全力で向き合うので、周りの人が肩が凝りました。ほぐすために私たちがイジるわけです。すると顔を真っ赤にしていました。面白い話を聞きました。上五島地区の堅信式が地区長本人の誕生日と重なり、大司教様が誕生日の歌を歌って、上品な帽子を被せてくださったのです。すでに癌は進行していて、ミサに臨席するのも大変な状態だったのですが、それでも最後まで嬉しそうに帽子を被ってくれていたそうです。彼の誠実さがよく分かる話でした。

中濱師は簡単なものしか食べませんでした。うどん、カレーがその

典型です。私は二度、黙想会の説教師に中濱師を招くため、12月27日使徒ヨハネの霊名のお祝いに、ハウス食品の高級レトルトカレーセットを用意して直接お伺いに行きました。すると彼は、とくに時効になっている話を蒸し返して、「浦上教会時代のカレー泥棒事件を話して良ければ引き受ける」と言ってきました。

たしかにこの事件は彼にとっては大事件でした。浦上教会時代、三人の助任が一人ずつ留守番をして二人は大手を振って月曜日休んでいたわけですが、私が留守番になっている週に、主任神父様から「今週甘鯛釣りに行こうで。休みはどがんなっとつとか」と聞かれ、中濱師を説得すれば何とかなると思い、「はい、ご一緒します」と返事したのです。

留守番を代わってもらうために、高級シェフが監修したという500円もするレトルトカレーを買って、留守番を代わってもらいました。運良くアマダイ・イトヨリを大漁して、おいしく頂いたのですが、夜10時になって小腹が空きました。中濱師は夜10時以降、決して一階の食堂に降りてくる人では無かったので、「明日までに埋め合わせればバレないだろう」と思い、プレゼントしたはずの500円のカレーを食べってしまったのです。

すると起こるはずのないことが起こりました。先輩が夜10時15分に、二階から一階の食堂に降りてきたのです。当然部屋はカレーのにおいが充満しています。中濱師は隠しておいた扉を開けるなり「なか!お前、食うたろ?」と問い詰めてきたのです。私は逃げ場もなく、明日買い直してくるので許してくださいと謝ったのですが、その後ずっと、この話を根に持たれてしまいました。「この話で黙想会の一回目をして良かったら引き受ける」と言われ、しぶしぶ受け入れた思い出があります。

中濱師は子どもが大好きで、子どもたちを遠足に連れて行くのはもちろん、司祭の忘年会で嬉野に行っても、自分のお土産は買わずに子どもたちのお土産をどっさり買って、両手いっぱい抱えて子どもたちの所に行くのが喜びでした。修道院にもその姿勢は変わりませんでした。

報告によると、最後まで教会に戻って小教区のミサをしたかったのだそうです。内心、周りは無理だと思っているのに、彼は絶対に小教区に戻るのだと言って、あらゆる治療を試し、余命三ヶ月だったのを二年間、耐え忍びました。最後の半年は、まさに「希望の巡礼者」でした。

すべてを、司祭としてイエス様にささげたと思います。NHKでアンパンマンの連続テレビ小説が流れていますが、彼の司祭生活はあんパンそのものだったと言って良いでしょう。小さな小教区でも、大きな小教区でも、持てるものをすべて分け与えてご自身をキリストのパンの材料にしました。決して真似のできない61年間の短距離走でした。

「すべての人が食べて満腹した。そして、残ったパンの屑を集めると、十二籠もあった。」(9・17)中濱神父様、その残った十二籠のパン屑は今どこにありますか。もちろん最後の赴任地だった上五島地区には愛着があり、必要でしょうからそれを奪うつもりはありませんが、下五島地区は私が責任持って配りますから、できれば、私たちの地区にも分けてください。

聖ペトロ聖パウロ使徒(マタイ 16:13-19)